

若者言葉からの気づきを考える

— 「ほぼほぼ完成している」と言われたら —

上席主任研究員 北村 安樹子

<あなたは使う？「ほぼほぼ完成している」>

言葉や表現をめぐる世代間のコミュニケーション・ギャップは、いつの時代も家庭や職場で話題になるテーマの1つである。文化庁が全国の16歳以上の男女3,579人を対象に行った「国語に関する世論調査」によると、若い世代でよく使われる「①ほぼほぼ完成している」という表現を、自分も「使うことがある」と答えた人は全体の27.3%で、「聞いたことはあるが使うことはない」と答えた人（41.2%）や「聞いたことがない」と答えた人（31.0%）がこれを上回った（図表1）。

この調査では、ほかにも5つの表現の使用状況をたずねている。これらのうち「③上から目線の言い方をされた」「④彼とはタメ口で話をする」「⑥自分の立ち位置を確認する」「⑤ガチで勝負をする」の4つでは①以上に「使うことがある」と答えた人が多く、いずれも4割を超える。

図表1 次の6つの言い方を聞いたことがあるか、使ったことがあるか（全体）（単位：%）

	聞いたことがない	聞いたことはあるが 使うことはない	使うことがある	わからない
① <u>ほぼほぼ完成している</u>	31.0	41.2	27.3	0.5
② 開始の時期を <u>後ろ倒し</u> にする	42.5	44.5	12.3	0.8
③ 上から <u>目線</u> の言い方をされた	4.8	37.2	57.4	0.5
④ 彼とは <u>タメ口</u> で話をする	12.6	35.2	51.0	1.2
⑤ <u>ガチ</u> で勝負をする	11.1	46.9	41.0	0.9
⑥ 自分の <u>立ち位置</u> を確認する	10.1	40.5	48.5	0.9

資料：文化庁「平成29年度国語に関する世論調査」の結果の概要より作成

<10代後半と20代では6割前後が使う「ほぼほぼ」>

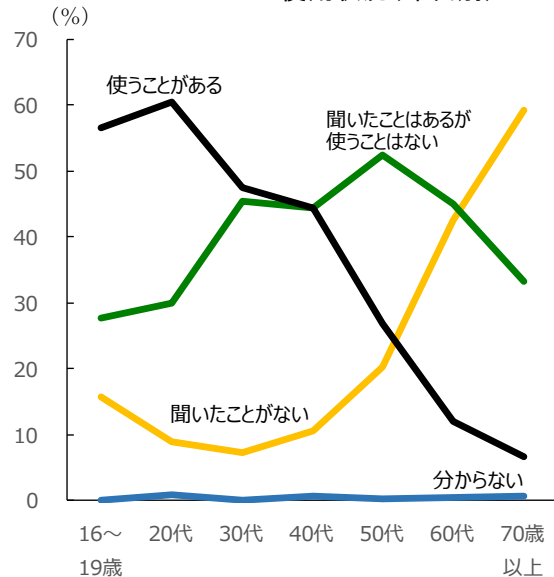
「①ほぼほぼ完成している」の使用状況を年代別にみた場合、16～19歳や20代では「使うことがある」と答えた人が6割前後と高い割合を占める一方、60代以降では1割前後とかなり低くなっている（図表2）。30～40代では「使うことがある」人と「聞いたことはあるが使うことはない」人が半数弱で拮抗し、60代以降では「聞いたことがない」人が4割を超える。

一方、②～⑥について年代別の使用状況をみると、②を除けばいずれも①と同じよ

うに、若い世代で「使うことがある」人の割合が高く、シニア世代では「聞いたことはあるが使うことはない」人や「聞いたことがない」人の割合が高い（図表4～7）。①と異なるのは、「聞いたことがない」と答えた人の割合が年代によらず①に比べ低い点である。

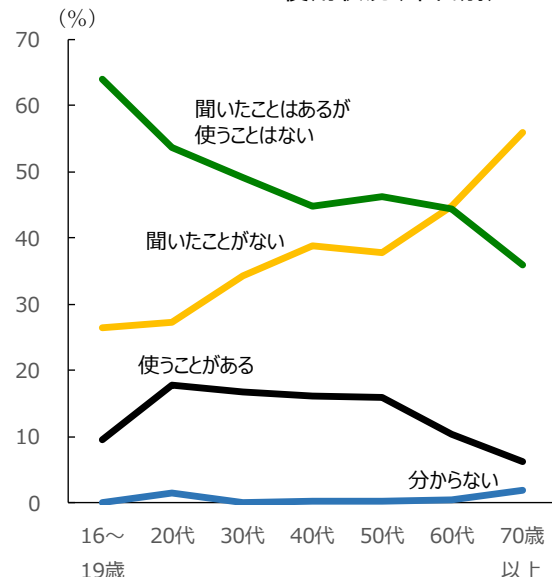
また、回答者全体で「使うことがある」と答えた人が最も少なかった「②開始の時期を後ろ倒しにする」に関しては、若い世代でも「聞いたことがない」と答えた人の割合が比較的高い（図表3）。つまり、他の表現に比べ使われる機会そのものが少ないと考えられる。以上の傾向をふまえれば、この調査でたずねられた6つの表現のうち、年代による感覚の差が最も生じやすいのは①といえるのではないだろうか。

図表2 「①ほぼほぼ完成している」の使用状況(年代別)



資料：図表1に同じ

図表3 「②開始の時期を後ろ倒しにする」の使用状況(年代別)



資料：図表1に同じ

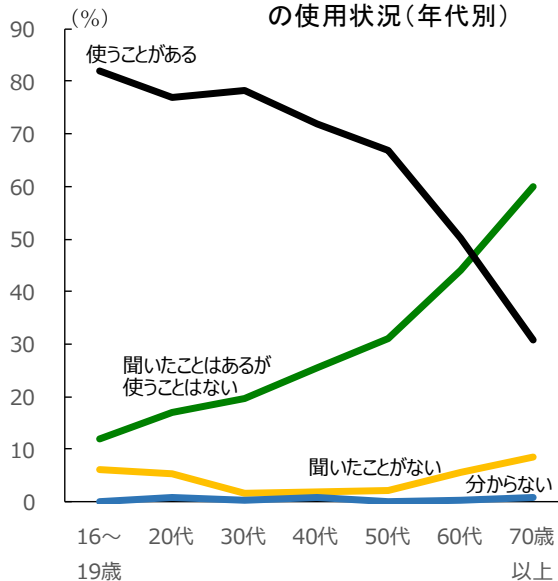
<若い世代が、他者が感じる違和感やとまどいを知っておくことの意味>

では、①では具体的に世代によるどのような感覚の差が問題になりうるのだろうか。想像しやすいのは、例えば若い世代の言う「ほぼほぼ完成している」が耳慣れない表現であるため、シニア世代が違和感やとまどいを感じたり、「ほぼ完成している」よりも完成に近いのか遠いのかわからなかったりする場合だろう。

近年では、多くの企業で60代以降も働く人々が増えている。異なる世代が、上司と部下ないしは同僚として、あるいは従業員と顧客としてなどさまざまな立場で接する機会も少なくないと考えられる。「ほぼほぼ完成している」という言葉の使用状況に世代によってこれほど大きな感覚の違いがあることをふまえると、部下や同僚が使う「ほぼほぼ」がどの程度なのかを共有したり、補うための情報収集や新たなコミュニケーションが必要になるケースもあるかもしれない。

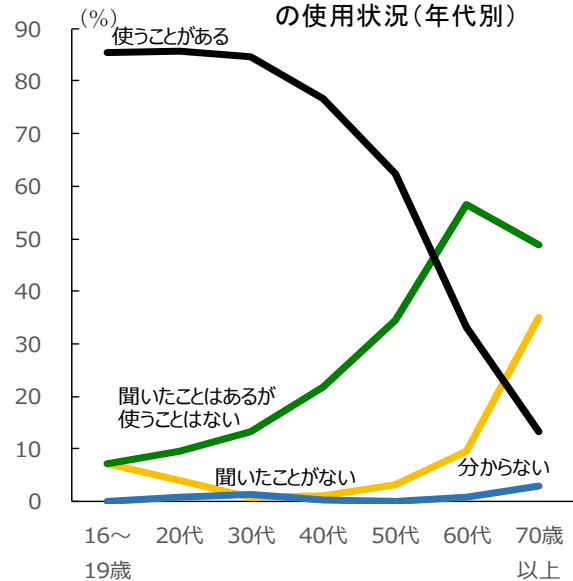
また、シニア世代を含め、多様な人々を含む顧客への対応や新聞・テレビなど言葉遣いやマナーが重視される場面では、こうした言葉使いに関する感覚の違いを互いが知っておく必要があるだろう*1、2。ちなみに、「ほぼほぼ完成している」は「ほぼ完成」よりも完成に近いことを強調する際に用いられることが多いようであるが、断定できないことを伝えたい場合の婉曲表現としても使われることがあるようだ。

図表4 「③上から目線の言い方をされた」
の使用状況(年代別)



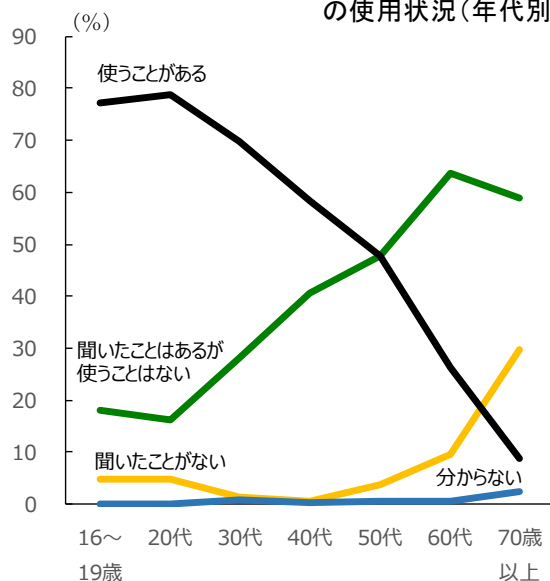
資料：図表1に同じ

図表5 「④彼とはタメ口で話をする」
の使用状況(年代別)



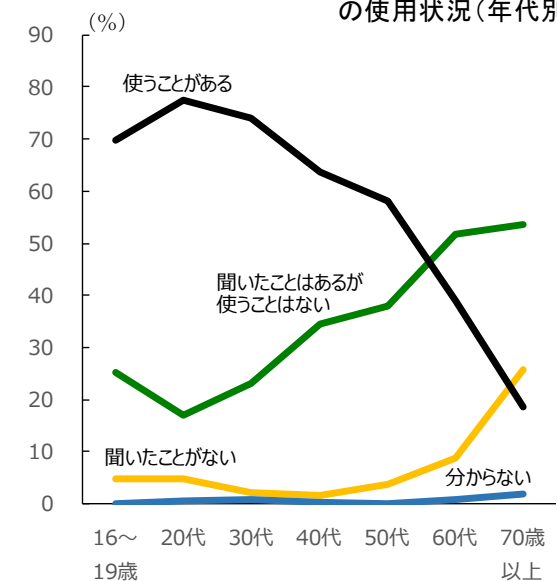
資料：図表1に同じ

図表6 「⑤ガチで勝負をする」
の使用状況(年代別)



資料：図表1に同じ

図表7 「⑥自分の立ち位置を確認する」
の使用状況(年代別)



資料：図表1に同じ

<若者言葉を使わない人が、そのニュアンスを知る意味>

若い世代が使う言葉や表現には、一時的な流行である場合も含めて、他の人にとってなじみのある従来の言葉では十分表現できなかつたり、想像できなかつたりする新たなニュアンスを含むこともあるだろう*3。例えば先の「①ほぼほぼ完成している」にしても、若い世代が、完成に近いことを強調したいのか、完成していないとは言いにくいために表現が婉曲的になっているのかを推し量ることによって、想定していたスケジュールを遅らせる必要性や、完成しない可能性に気づくことができる場合もあると思われる。

また、会社や職場によっては、若い上司や同僚のいう「ほぼほぼ」が含むニュアンスを年長者が理解しなければならない場面も増えているかもしれない。企業等で働く人々の年齢や性別、使用言語などが多様になるこれからの時代は、既成の概念に縛られ過ぎず、さまざまな言葉や表現に柔軟であろうとすることが、コミュニケーションを豊かにしてイノベーションをもたらす原動力になる場合もあるのではないか。

(ライフデザイン研究部 きたむら あきこ)

【参考文献】

- *1 野口恵子『「ほぼほぼ」「いまいま」?!クイズおかしな日本語』光文社 2016年.
- *2 滝島雅子『「ほぼほぼ」って使っている?』2018年11月1日公開 NHK放送文化研究所ホームページ「放送現場の疑問・視聴者の疑問」
(https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20181101_4.html、2019年6月20日アクセス).
- *3 北村安樹子「何を「標準」とするか」『Life Design Report』2013年4月号 Spring:36-38.